

# 大宮地域の文化遺産 (大宮・東大宮地域自治区管内)

## 【地域の歴史と特色】

大宮地域は、南流する大淀川左岸に位置し、古くは宇佐八幡宮領宮崎庄として開発されました。現在でも、その当時の名称「北方」「南方」の名残りとして、「下北方町」「南方町」の地名が残っています。

中世には、伊東氏と島津氏の争奪の地となりましたが、15世紀前半には伊東氏の所領となり、その直轄領として代官が置かれました。

近世は、下北方村・名田村・池内村・南方村に分かれ、延岡藩領となり（一時、幕府領の時期あり）、下北方村には藩の宮崎陣屋が置かれました。

## 【文化遺産マップ】



# 大宮地区

みやざきじんぐう

## ① 宮崎神宮



みやざきじんぐうしゃでん

### 宮崎神宮社殿（国登録有形文化財）

宮崎神宮の祭神は神武天皇で、古くは神武天皇宮、舟塚宮とも称しました。

明治32年（1899）9月に催された神武天皇御降誕二千六百年大祭を機に大造営が計画され、足掛け8年の月日を費やし、同40年（1907）10月に完成しました。

伊東忠太の設計により造営された社殿群は、神殿・幣殿・渡殿・神饌所・御料屋・透間垣・拝所・正門・玉垣・石柵から成り、左右対称の配置と復古的で端正な社殿形式に特徴が見られます。



みやざきじんぐうちょうこかん

### 宮崎神宮徴古館（国登録有形文化財）

明治42年（1909）3月、宮崎神宮の宝物や書籍を陳列し、保存する目的で建築されました。神宮に残る棟札には、工事設計者として皇室技芸員に任命されていた佐々木岩次郎の名が記されています。

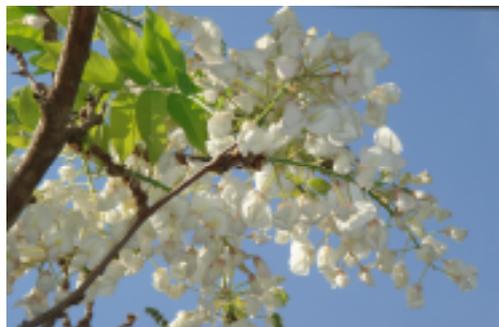
木造2階建て、寄棟造妻入棧瓦葺きの建物の正面には、切妻屋根の玄関が配置され、外壁全体を覆う「なまこ瓦」に特徴が見られます。



みやざきじんぐうのおおしらふじ

### 宮崎神宮のおオシラフジ（国天然記念物）

境内（本殿の東南）にあるオオシラフジは、中国原産で、同種のなかでは最も大きい樹木とされています。根元周りは約3mあり、地上約11mのところできつに分岐しています。5月中旬頃には、ゆらゆらと真白で大きな花を咲かせ、人々の目を楽しませてくれます。指定名称：宮崎神社のおオシラフジ



ふなつかこふん  
📷 船塚古墳（県史跡）

船塚古墳は、宮崎神宮本殿の北側に位置する前方後円墳です。前方部の裾がやや広がる古墳時代中期末ないし後期に築造された古墳として形状を良く残していることから、昭和52年4月1日に県の史跡に指定されました。



やぶさめしんじ  
📷 流鏝馬神事

宮崎神宮の流鏝馬神事は、古くは「ヤクサミの神事」と称し、百井塘雨（もものいとう、?-1794）の『笈埃（きゅうあい）随筆』に、その頃の様子が記されています。それによると、毎年秋の祭礼日に盛大に催され、開始前には神前において礼式を行っていましたが、その実は競馬として行われており、本来の姿とは程遠いものであったようです。

昭和15年（1940）、紀元二千六百年祭奉祝記念事業の一環として流鏝馬馬場が新造され、小笠原流の斉藤直芳に指導を仰ぎ、それ以前の古式も尊重して、「古式流鏝馬」が再興されました。現在は、毎年4月3日に五穀豊穰を祈る神事として執り行なわれています。

みやざきけんそうごうはくぶつかん・みんかえん  
② 宮崎県総合博物館・民家園

きゅうくろぎけじゅうたく  
📷 旧黒木家住宅（国重要文化財）

宮崎県総合博物館の敷地内にある旧黒木家住宅は、高原町祓川地区にあった郷土屋敷の建物を移築復元したものです。南九州に見られる分棟型民家の典型で、居室部分（オモテ）と土間部分（ナカエ）を別棟にし、「テノマ」と呼ばれる板敷きの間で結んでいます。「オモテ」「ナカエ」の分離・接合が比較的自由に行われやすい中で、双方の年代が揃っていることは貴重で、この形式の民家の好例といえます。

建築年代は、解体工事の際に発見された墨書によって、天保5年（1834）から2年間かけて建てられたことが分かっています。



きゅうふじたけじゅうたく  
 旧藤田家住宅（国重要文化財）

旧藤田家住宅は、九州山地に囲まれた五ヶ瀬町の山村にあった農家で、昭和48年2月23日に国の重要文化財に指定された後、宮崎県総合博物館敷地内に移築・保存されました。この建造物は、県内で確認された民家としては最古で、間仕切柱の刻銘により、天明7年（1787）に建てられたことが分かっています。九州山地中央部に残る民家の古い形式を伝える数少ない建物として、現在も大切に保存されています。



つちもちもんじょ  
 土持文書（県有形文化財）

高岡町の清水（きよみず）家に代々伝えられてきた土持一族に関する文書群で、中世日向の歴史を知る上で最も貴重な文書の一つとして評価されています。

土持氏は、中世日向における代表的豪族で、在庁官人、郡司、地頭などを一族で占め、南北朝期には武家方に属して活躍しました。清水家は土持七党の一家で、文書群には系図一冊を含む計30冊があり、大部分は南北朝期の軍忠状・感状・挙状・安堵状などで占められています。



みやざきししもきたかたこふん  
 ③ 宮崎市下北方古墳（県史跡）

昭和14年（1939）に、前方後円墳4基、円墳12基の計16基が県の史跡に指定されました。現在は前方後円墳4基、円墳9基を確認することができます。古墳群が立地する丘陵頂部に位置する13号墳は、全長約96mの前方後円墳で、円筒埴輪のほか、南九州では珍しい形象埴輪も出土しています。これに1号墳（前方後円墳、全長約78m）、3号墳（前方後円墳、全長約74m）と続き、築造の時期は、5世紀末から6世紀中頃と考えられています。

下北方5号地下式横穴墓は、昭和50年7月1日に9号墳の裾部分を開墾中に発見されました。玄室からは、金製垂飾付耳飾、銀装大刀をはじめ武器、武具、馬具、農工具、青銅鏡、玉類などの多量の副葬品が出土しました。これらは同時期の日本各地にある有力古墳と遜色のないもので、当時の九州南部の古墳文化の特質や日本列島の古墳時代社会のあり方を知るうえで重要な資料ということで、令和2年に国の重要文化財に指定され、現在は宮崎市生目の杜遊古館で見ることができます。



宮崎県下北方5号地下式横穴墓出土品  
 （国重要文化財）

いけうちよこあな

#### ④ 池内横穴（県史跡）

現在、平和ヶ丘団地となっている丘陵には、大小合わせて33基の横穴がありましたが、昭和43年に行われた団地造成により、4基の代表的な横穴を残し、他の29基は消滅してしまいました。現在は、この4基が県の史跡に指定されています。

横穴は、山の斜面に穴を彫り、死者を葬った墓の一種で、古墳時代後期を中心に造られました。



みやざきじょうあと

#### ⑤ 宮崎城跡

宮崎城は、池内町の南北方向に連なる標高93mの丘陵上にあり、宮崎平野を一望できる要害の地に立地しています。池内城とも称し、丘陵の尾根筋に曲輪群を連ねる大規模な城郭は、南北700m、東西約500mに及びます。

文献史料における初出は建武3年(1336、北朝年号)で、南朝方に味方した凶師六郎入道慈円が池内城に立て籠もり、北朝方の土持宣栄に攻められたとあります。『上井覚兼日記』には、天正8年(1580)に、島津氏の老中上井覚兼が宮崎地頭として宮崎城に入り、城内鎮護の毘沙門堂を建立したり、弓場普請を行ったことが記されています。また、同16年には、高橋元種領となり、城主として権藤種盛が入りましたが、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦直後には、伊東氏家臣稲津掃部助に攻められ、落城しています。

池内地区に伝わる金閣寺踊りは、宮崎城主上井覚兼が、京都を中心に武家の間で愛好された幸若舞を庶民に普及したのが起源といわれています。現在は、宮崎市の民俗芸能として登録され、有志保存会により伝承されています。



民俗芸能 和田の金閣寺踊り



なごじんじゃ  
⑥ 奈古神社

古くは奈古八幡宮と称し、宇佐八幡宮領宮崎庄の成立とともにその鎮守として勧請されたと考えられています。宝治元年（1247）の同社所蔵文書には、海清久が奈古社大宮司に補任されたとあり、その後も海氏が当社の大宮司職を世襲しました。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には、「那古八幡」と見え、南方・池内方・北方萩原などに合わせて5町4段と屋敷2ヶ所が社領として記されています。

慶長18年（1613）の神領は高10石で、屋敷2反余を合わせて1町余あり、大祭時には延岡藩代官の社参が通例として行われました。また、内藤氏の入部以降は、藩主代参となり、祈願所として位置付けられました。



さたじあと  
⑦ 沙汰寺跡

下北方塚原にあった真言宗寺院で、『上井覚兼日記』によれば、天正12年（1584）2月22日に、宮崎地頭上井覚兼が、当寺境内で行われた蹴鞠を見物するためにこの寺を訪れています。

江戸時代は古城村の伊満福寺末寺で、元禄11年（1698）の奈古八幡神社文書によれば、高10石が除地とされています。明治3年（1870）に廃寺となり、現在は、その時代を物語る古石塔が残されています。

📷 かげきよびょう  
景清廟

沙汰寺跡の境内には、平景清を祀った景清廟があります。景清は、平家滅亡後に日向国に下向し、宮崎郡内で300町を領し、宇佐・巖島・稲荷の三神を勧請して古城に八幡宮を建立したと伝えられています。

境内には平景清の墓と伝えられる石塔があり、寛政4年（1792）に下北方村を訪れた高山彦九郎は「筑紫日記」に、「薬師堂南向右に水鑑景清大居士墓、西向千手石、並ひて社の如く覆ひ有り、行人削りて目の為、瘡の為メにす、景清墓二尺、高サ五尺余有り、古の墓碑は沙法（汰）寺に納むと云ふ」と記しています。



## 東大宮地区

おおしまじんじゃ

### ⑧ 大島神社

大島神社には、農業の神様であるアマツヒコホニニギノミコトと、学問の神様である菅原道真公が祀られており、受験生等の参拝も多く見られます。

神社に残る棟札によると、約500年前には神社があったものと考えられます。

この神社で、明治の初めから約100年もの間受け継がれてきたのが、大島神社神楽です。神楽の由来は定かではありませんが、大島神社創建と同時に伝えられてきたと言われています。神楽の間には厄払いの式典が行われ、厄払いと豊作祈願の神楽として舞い継がれてきました。春社日と大晦日に奉納され、夏祭りには獅子舞が町中を練り歩きます。神楽を後世まで残していこうと、若者たちが立ち上がり大島神社神楽保存会を発足させ、活動しています。



民俗芸能 大島神社神楽

たかやじんじゃ

### ⑨ 高屋神社

祭神はヒコホホデミノミコト・トヨタマヒメノミコト・景行天皇で、高屋八幡宮・高屋宮とも称し、宇佐八幡宮領村角別府の鎮守として勧請されました。境内は、クマソ征伐のために日向国を訪れた景行天皇が約6年にわたり滞在した「高屋宮（たかやのみや）」の跡、又は日本書記に記されるヒコホホデミノミコトの陵墓「高屋山上陵（たかやのやまのうえのみささぎ）」の伝承地の一つとされています。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）によれば、村角の内に村角八幡宮領として3町の免田と屋敷3ヶ所、村角正祝子分として田1町6反と屋敷1ヶ所があったと記されています。

境内で奉納される高屋神社神楽は、由来は定かではありませんが、享保14年（1729）銘の神楽面が残ることから、江戸時代前期には舞われていたと考えられています。毎年3月の春社日に、厄払いと五穀豊穰を祈念して奉納され、神楽の間には厄払いの式典が行われます。



民俗芸能 高屋神社神楽(市無形民俗文化財)